

“元気な高齢者”のお気に入りの場所について ーデンマーク・Wiedergårdens Aktivitetshus の調査からー

やまざき
山崎 さゆり

〈要 旨〉

世界に名立たる高福祉国家・デンマークにおける先進的な福祉制度は、日本でも数多く紹介されている。本研究では、デンマークにて介護予防の観点からも重視されている高齢者通所施設・アクティビティセンターと、その利用者を対象とした調査の結果から、その具体的な取り組みの成果を知り、歴史的・文化的差異を踏まえた上で日本の実情に即した生活環境の整備課題を見出そうとしている。本報では、アンケート調査結果に基づき、要介護以前の“元気な高齢者”によって好まれよく利用される場所について4つの空間的特性を明らかにした上で、その成立条件として「利用者参加」と「サービスの選択利用」が可能なシステムと空間形態が関与しているであろうことを示唆した。

〈キーワード〉

高齢者通所施設 地域施設 アクティビティ 余暇文化活動 社会参加
介護予防 デイサービス 在宅高齢者

I はじめに

デンマークは高福祉国家として、また人々に幸福感を与える美しい国として名高い¹。このようなデンマークの生活環境のあり方を知り学ぶことによって、日本の実情に即した高齢期における生活環境の整備課題を見出す上で、大きなヒントが得られるのではないかと考えた。

そこで2008年の10月から半年間、デンマーク・コペンハーゲンに滞在し生活環境の概略を把握すると同時に、“元気な高齢者のお気に入りの場所”の空間的条件とその背景を見つけ出すための調査を実施した。ここで“元気な高齢者”とは要介護状態に至る前の高齢者を指し、“お気に入りの場所”とは「多くの人に利用され、かつ好まれている空間」である。本調査から、このような要介護以前の“元気な高齢者”の期間を出来る限り延長させ促進するような環境条件を探す手がかりを見出したいと考えたからである。

Ⅱ デンマークの高齢者福祉制度の概要

デンマークは、人口約 554 万人、面積約 43,000 km²（九州の約 1.2 倍）の国である。地方行政区画は、2007 年 1 月からスタートした新しい地方自治制度の下では、13 の Amt（amt）が廃止され新たに 5 つのレギオン（region）が置かれ、271 あったコムーネが 98 のコムーネ（kommune・平均人口 5.5 万人）に統廃合される。この 2007 年地方自治体再編成では、国は、人口 2 万人以下の小規模コムーネを合併して 2 万人以上の規模に、その他は 3 万人以上となるよう推進したが、具体的な実施はコムーネ同士の話し合いのもとに進められた。本研究で対象とした施設が立地するドラウエア・コムーネ（Dragør Kommune）（図 1）は、人口が当時 1 万 3 千人であったが合併を選ばず、「周辺のコムーネと広域連携を図ることで公的サービスの質を保つことで市民の合意を得ている」。²

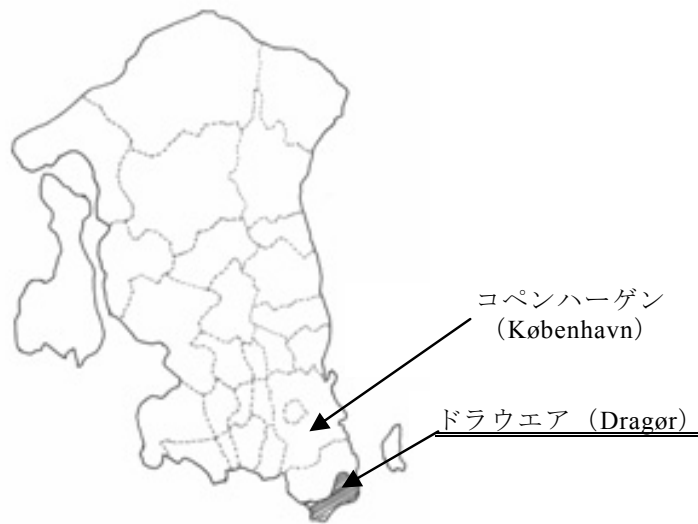


図 1 デンマーク首都地域 (region) 主要部とドラウエア・コムーネ

5 つのレギオンには医療に関わる事業のみが残され、その他の業務は、レギオン内のコムーネが中心となって行なわれる。デンマークの高齢者福祉サービスは税金を財源とする公的サービスであるが、大きくなったコムーネが、子ども・高齢者のケア、健康、失業者の教育・訓練と雇用対策、徴税、自然環境・地区計画、地域施設の管理等、社会サー

ビス全体の責任を担うこととなった。

すでにデンマークでは、十分な量と質の福祉サービス資源を背景に、1987年に制定された「高齢者ならびに障害者住宅法」によってその後の高齢者向け住宅の計画・運用基準を定め、翌年からわが国の特別養護老人ホームに相当するプライエムの新規建設を停止し、施設ケアではなく在宅ケアによる高齢者対策へと移行していった。この在宅ケアへの移行に当たっては、1982年の高齢者問題諮問委員会答申（アナセン報告）で示された3つの原則（高齢者福祉三原則）と7つのケアシステムの影響が大きいといわれている。高齢者三原則とは、①継続性の原則、②自己決定の原則、③自己資源の活用・開発の原則であり、7つのケアシステムとは、1) 補助器具、2) 予防とリハビリテーションの重視、3) ホームヘルプサービスの充実、4) 訪問看護サービスの充実、5) 24時間体制の確立、6) 給食、7) 文化活動の展開である。

こうして、高齢者の居住の場は基本的に「住宅」となり、住宅に居住する高齢者に対して各種の生活サービスが必要に応じて供給され、住み慣れた環境で生活が継続可能なように転換したのである。既存のプライエムは、高齢者向け住宅に改造されると同時に「住宅機能」と「ケア機能」を切り離すことを前提に存続が認められた。さらに、1997年には、「社会サービス法」、「積極的社会政策法」、「社会行政における権利保障および行政管理法」、「社会年金に関する法律の改正」の4つの法律が制定され、ますます個人の生活が強調されると共に、予防的施策に重点が置かれるようになる

高齢者住宅に併設される「デイセンター」は、自宅で生活する高齢者が地域の人々と交流し様々な活動を行ない、生活活性化と社会参加を図るものであるが、盛んな交流・活動によって虚弱化を防止するという予防の観点からも効果的とされている。利用者の身体状況により、虚弱な高齢者（必要性を認定された人々）を対象としたデイセンターと、比較的自立度が高い高齢者を対象としたアクティビティセンターの2種類があり、本研究における対象は後者に含まれている。

Ⅲ 調査の概要

1 調査対象

調査は、コペンハーゲン中心部から約10km離れたドラウエア・コムーネにあるヴィーダゴーエン・アクティビティセンター（Wiedergårdens Aktivitetshus、以下W・A）と、その利用者を対象として実施した。W・Aを調査対象としたのは、現地にて複数人から「（要介護以前の）元気な高齢者が多く集まる」として推薦された数施設の内、調査の承諾と協力が得られたことからである。

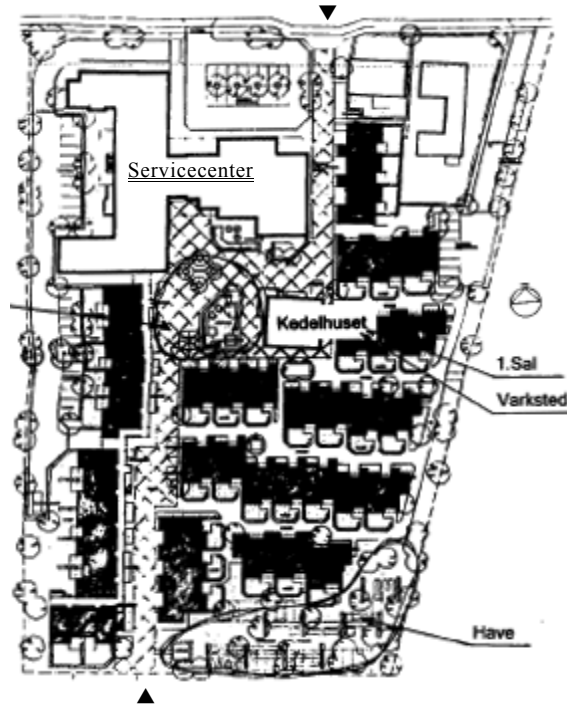


図2 Wiedergården 配置図

W・Aは、1989年住宅組合 Strandparken がコムーネから買い取った土地（繊維工場跡地 15,839 m²）に建てられた Wiedergården（図2）内にあり、その主な機能空間は、ホームヘルプ、デイホーム、ショートステイ、理学・作業療法等がある医療・保健部門が入ったサービスセンター 4,475 m²の中に含まれ、それらの機能空間は全体として高齢者福祉サービスの地域拠点となっている。Wiedergården にはこの他、高齢者住宅（年金受給者の賃貸住宅）45戸、家族住宅10戸、青少年住宅2戸、知的障害者対象のコ・ハウジングの計 11,364 m²の住宅が建てられており、これらは、高齢者福祉三原則に基づき“出来るだけ長く自宅で”暮らすことを目指した高齢者住宅計画の新しい型の好例とされている³。

W・Aは、コムーネ内に住む国民年金受給者等の余暇文化活動のための場であり、常時約40種のアクティビティがボランティアの年金受給者によって運営（利用者運営）され、毎週約1,100人の利用者が個々のニーズに合わせて選択利用している。利用に際しては登録の必要はなく、食費と材料費を除いて参加は無料となっている。

W・Aの運営計画と実質的な執行に際しては、毎年開催される総会にて利用者により選ばれた5人のメンバーと2人の補佐から成り立つ利用者委員会（Brugerrådet）が、利用者の希望や関心を取り上げて行なう。また、パーティ等の開催や施設広報誌・ホー

ムページを通しての情報提供、寄付金探し等の目的で、2008 年 12 月時点では 7 つの委員会が設置され、計 24 人の利用者がそれらの委員会に所属し中心となって活動を行っていた。W・A に雇用されているのは日常リーダーと 2.6 人のカフェ従業員となっているが、カフェには他に 6 人のボランティアが関わる。W・A の開館時間は、平日の 9 時 30 分から 16 時まで。カフェ（Cafeen）の営業時間は 15 時 30 分までとなっており、ほぼ開館時間を通して営業され、暖かい食事の他に、サンドウィッチやケーキ、コーヒーなどが提供される。

このような利用者運営によるアクティビティセンターは、高齢者分野におけるコミュニネの予防的取り組みの特に重要な一つとして位置づけられている。

2 調査の方法と内容

調査は、2009 年 1 ～ 3 月に以下の三段階で実施した。

【建物と利用状況の概要把握】

W・A を訪問・見学する。その際にリーダー Hanne 氏から施設と利用者の概要、活動内容等についてヒアリングを行ない、入手した関連資料等と照合しつつ調査計画を立案した後に数度の打ち合わせを行なう。

【アンケート調査】

事前にリーダー Hanne 氏と相談・決定した調査日において、来所した利用者に対し協力を依頼する。アンケート用紙は自記入式で同日回収。アンケート・シートは以下の 4 種類から成っている。

- ① W・A の利用頻度、交通手段、W・A 以外に行くアクティビティセンターの有無、基本属性、およびヒアリング調査の可否等を聞くシート。
- ② 参加するアクティビティについて、縦軸がアクティビティ種類、横軸が参加の有無と参加の気持ち（「大変楽しい」・「楽しい」・「あまり楽しくない」）となっており、アクティビティの種類ごとに当てはまる欄にチェックを入れるようになっている。（表 1）
- ③ アクティビティ以外の行動（「お喋り」「タバコを吸う」「軽食」「飲み物を飲む」「休憩」「その他」）について、W・A、および敷地内（図 2）のどこで行うかをチェックしてもらう。（表 2）
- ④ W・A の平面図、および配置図がレイアウトされた用紙に、「好きな場所」と思う場所の全てに印を入れてもらう。

【ヒアリング調査】

アンケート調査の回答者の内、ヒアリング調査への協力を承諾した 68 名から 5 名を選出し依頼。選出に当たっては、年齢・性別等が出来るだけ散らばるようにした。

表 1 調査票（参加するアクティビティと参加の気持ち）

kolonne :	1	2	3	4	kolonne :	1	2	3	4
AKTIVITET Sæt X	Ja, jeg benytter denne aktivitet	Jeg er meget glad for denne aktivitet	Jeg er glad for denne aktivitet	Jeg er ikke rigtig glad for denne aktivitet	AKTIVITET Sæt X	Ja, jeg benytter denne aktivitet	Jeg er meget glad for denne aktivitet	Jeg er glad for denne aktivitet	Jeg er ikke rigtig glad for denne aktivitet
Alsang					Moderne dans				
Besøgstjeneste					Motionister				
Bevægelse					Patchwork				
Bibliotek					Pladehylden				
Billard					Poker				
Bogbinding					Skak				
Bordtennis					Smedeværksted				
Bridge					Spansk				
Decoupage					Stenslibning				
Digital foto					Strik til nødhjælp				
EDB					Studiekredse				
Engelsk					Styrk Ryggen				
Fiskeri					Syning				
Frimærker					Træværksted				
Gymnastik					Videogruppen				
Husorkester					Whist				
Kuglerammen					Andet, skriv:				
L'hombre									
Linedance									
Maling/tegning									

表 2 調査票（アクティビティ以外の行動とその場所）

Hvad gør jeg i rummet ud over selve aktiviteten	Sæt X	Stueetagen					Kælder		Kedelhuset	
		Festsal	(stensliber)-værksted 2	(Sy)-værksted 1	Foyer/Bibliotek	Café	Motions-lokale	Værksted	1.Sal	
Snakker										
Spiser										
Tager noget at drikke										
Slapper af										
Læser										
Andet, skriv:										

Hvad gør jeg i rummet ud over selve aktiviteten	Sæt X	Første sal				Udendørs				
		Møde rum	Studierum 1	Studierum 2	Ved billard	Mod kedelhuset	Terrasse	Petanque	Torv	Have
Snakker										
Spiser										
Tager noget at drikke										
Slapper af										
Læser										
Andet, skriv:										

ヒアリングの主な内容は、生活史、家族について、人間関係、週間スケジュール、趣味や生きがい等であり、調査対象者の過去から現在へと連なる生活全体において、現在の“お気に入りの場所”がどのような位置づけにあるのかを明らかにすることが調査の主要な目的となっている。

調査に当たっては、アンケート調査・ヒアリング調査共にデンマーク語にて行った。本報では②のアンケート調査の分析結果を中心に紹介する。

IV 結 果

1 分析対象の概要

分析対象として、計 98 人（男性 43・女性 54・不明 1）のデータが得られた。平均年齢は男性 71.41 歳、女性 70.67 歳で 70 歳を頂点とした山を描く。現職業は「年金生活者（Pensionist）」「準給与受給者（efterløn）」が約 9 割、過去の職業ではほとんどの者が具体的な職種⁴を記入していた。

2 アクティビティセンターへの来所

W・A への来所頻度は、「週 1」が 32 件、「週 2 以上」が 66 件で、これらの別は性別・年齢共に無関係である。

表 3 は、自宅から W・A までの利用交通手段別にそれぞれの傾向をみたものである。男女共に「自転車」が最多でその平均年齢は他より低い。自転車は、コペンハーゲン市民にとって重要な交通手段と言われているが、ここでも例外ではない。大きな通りには歩道と車道の間に自転車専用レーンがあり、自動車と同様に右側通行で逆走不可となっているなど、自転車が日常の移動手段として安全に利用出来るよう環境が整えられていることがその背景となっている。

表 3 交通手段と所要時間・来所頻度（N=人数）

		徒歩	自転車	バス	車
利用 者		22	46	5	30
	男性	6	16	1	14
	女性	15	29	4	14
所要時間	5分以下	6	17	2	16
	6～10分	10	18	3	11
	11～15分	5	8	—	2
	16分以上	1	3	—	1
来所頻度	週1	4	16	0	13
	週2以上	18	30	5	17

このような「自転車」に次いで、男性では「車」、女性では「徒歩」がそれぞれ続き、これらは逆に高年齢の傾向にある。所要時間は10分以下が多く、来所頻度では「徒歩」で高く「車」で低い傾向がみられた。

一方、W・A以外の他の施設を利用しているかを問う設問に対しては、利用しない者が75人と8割弱、利用する者ではW・Aに「バス」か「車」を使う人の割合が高かった。

3 Wiedergårdens Aktivitetshus の利用実態

図3はW・A主要部分の平面図である。図4はW・A南面で、写真左方が南側エントランス、右方がカフェ部分となっている。図5は別棟に建つ元ボイラー室のKedelhusetであり、GF（地上階）は木工場、上階の1Fは運動室である。

また表4は、各室で実施されている主なアクティビティを始めとする各種行為の傾向などをまとめたものである。参加するアクティビティは、一人当たり平均1.85(男性1.63・女性2.02)種、人気が高かったのは、パソコン、ダンス、運動、歌、体操、次いでビリヤードである。

各室のアクティビティ以外の行為の種類・数についてはCafé(図6・7)が群を抜くが、これは室空間の用途から当然である。また広い面積と高い傾斜天井、外部に面した開放的な連窓の室内空間は、様々な行為の発生を容易に連想させる。一方、Motions-lokale(図8)に関しては、その目的が他室以上にアクティビティ(マシンジム)に特化しているにも関わらず、他の行為が多く見られる。これは、マシンジムが各自のペースで実施可能であることに加え、室面積自体が120㎡と大きく、他行為と並行しやすい広さを持つからと言える。



図4 Wiedergårdens Aktivitetshus 南面



図5 Kedelhuset

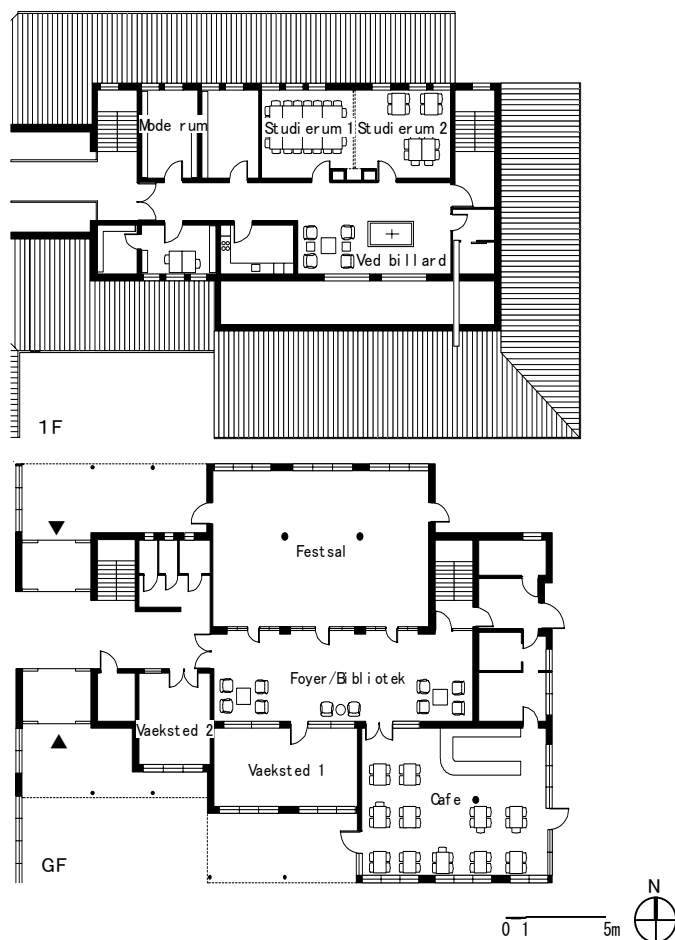


図3 Wiedergårdens Aktivitetshus 主要部分平面図

表4 W・A各室におけるアクティビティ、他行為および好きな場所とする人数

階	部屋	m ²	主なアクティビティ*1	他行為		好きな人*3	
				種類*2	延べ数	男性	女性
GF	Festsal	121.00	歌、運動、卓球、体操、ハウスバンド、ダンス	C S D	10	9	28
	Foyer	85.68	読書	C D R	3	4	5
	Café	98.00	(なし・食事)	C S D O	80	16	18
	Værksted 1	41.00	デコパージュ、チェス、裁縫、スペイン語、レリーフ	C D R	4	1	8
	Værksted 2	24.48	製本、石工、切手、英語、ポーカー、釣り	C D	4	3	3
1F	Studierum 1	29.00	ブリッジ、デジタル写真、パソコン、カード、ペイント、ビデオ、ホイス、勉強	C D	9	13	10
	Studierum 2	29.00		C	5	7	4
	Ved billard	48.96	ビリヤード	C D R	9	7	0
BF	Motions-lokal	120.00	運動(マシンジム)	C D R O	30	9	21
	Kedelhøset GF	45.00	鍛冶場、木工場	C	2	3	1
	Kedelhøset 1F	100.00	卓球、ストレッチ	C	1	1	2

*1 下線は男性、太字は女性の参加が多いとのこと→W・Aリーダーからのヒアリングより。

*2 C～お喋り、S～軽食、D～飲み物を飲む、R～休憩、O～その他。

*3 各室を“好きな場所”としてマークした人の人数

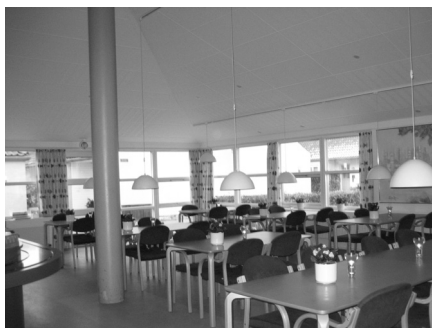


図 6 Cafe



図 7 Cafe



図 8 Motions-lokale



図 9 Festsal



図 10 Foyer



図 11 Ved billard

4 高齢者の“好きな場所”

多くの高齢者が“好きな場所”とする室空間の具体的要因を列挙すると、

- ① 集会場・Festsal (図 9) は多くの動的なアクティビティがなされ、それを十分に行ない得る広さ・形態を持つ空間である。また、天井高が丸柱から窓際にかけてなだらかに傾斜しつつ低くなっているため、大空間が均一なのっぺりした印象にならず柔らかな変化を感じさせる空間となっている。
- ② Café もまた食事を中心とした各種行為を快適に行ない得る広さ・形態を持つ。にぎやかな昼食時間帯以外においても、Café に備え付けの新聞を読む人やコーヒー

を片手に談話する人々の姿が、特に窓際や入り口近くのテーブル廻りで見られる。また、15 時頃になると各テーブルに蠟燭の火が灯されるが、その様子は写真（図 6）からも窺い知ることが出来る。

- ③ Motions-lokale は運動以外の行為を許容出来る広さ・形態を持つ。
- ④ 1F の Studierum 1 が Studierum 2 より人気が高いのは、アクセスが容易く開放的なことが関係すると思われる。Studierum 2 へはビリヤード台周辺（図 11）の人々の間を通り抜けて行く必要がある。

一方、不人気な室空間としては、通り道となる Foyer（図 10）、Ved villard、狭い Værksted 2、別棟にある Kedelhuset が挙げられるが、それらの空間の物理的な弱点を補うプラス面をいずれにも見つけることが出来なかった。中でも Foyer は、人々によく利用され、また一見すると中々雰囲気が良い空間にも思えたが、利用者にとっては通り道であり、落ち着かない空間と感じるのかも知れない。

V まとめと考察

以上から、“元気な高齢者のお気に入りの場所”の空間的特性は、以下の 4 点にまとめられる。

- (1) 自宅から徒歩 10 分圏内であること：全対象者が週 1 以上来所し多くが 10 分以内であり、自転車・バス・車の利用は比較的若年層か他施設利用者の傾向が見られた。
- (2) よく利用する空間・自らの参加するアクティビティがなされている空間に対して、より親しみをを感じる。
- (3) 目的行動に際し十分な室面積・容積が確保され圧迫感を感じない空間であると共に、柔らかな変化を内包した空間である。：人気が高い室空間には、広い面積、高い傾斜天井などの共通性が認められた。
- (4) 室空間の場所・形態は、他からアクセスし易いと共に通り道にはならない。

以上のような空間的特性に加えて、W・A では、アクティビティの企画・実施から施設の利用・運営・維持整備に至るまで、利用者が主体となって実質的な執行に参加していること自体が、W・A 全体を“元気な高齢者のお気に入りの場所”とする大前提になっていることを推察することが出来る。

さらに、飲食、各種アクティビティプログラム、トレーニング活動等のサービスが、「相互独立的に提供され、利用者が個々のニーズに合わせて選択利用できるもの」⁵ となって

おり、各活動を並行して実施することが出来るような多様な規模・形態の空間が用意されていることもまた、“お気に入りの場所”が成立する上での重要な条件であろう。

わが国のデイサービスの多くは、実際には職員主導のプログラムにより、利用者は限定された時間と空間の範囲内で一定の行動を求められる状況が見られ、近年、こうした高齢者通所施設の問題点を指摘する論文⁶が次々と発表されている。W・Aの調査を通して得られたデンマークのアクティビティセンターの現状は、このようなわが国における問題点をさらに浮き彫りとしつつ、解決の糸口を見出す新たな可能性を示唆しているのではないだろうか。

今後は、利用者を対象としたヒアリング調査結果を元に、高齢者のW・Aに対する具体的な関わりと各々の日常生活全体における“お気に入りの場所”の位置づけという観点から分析を進め、“元気な高齢者のお気に入りの場所”を獲得するに至る質的条件を明らかにして行きたい。

(謝辞) 本研究は、2008年10月から2009年3月の期間、デンマーク王立アカデミー建築学校にて客員研究員として滞在し行なったものである。指導教官のPeder Duelund Mortensen教授、調査にご協力いただいたWiedergårdens Aktivitetshusのリーダー Hanne Berthelsen氏と利用者の皆様に感謝申し上げます。

<脚注>

- 1 デンマークは「世界一幸せな国 (2006 レスター大学)」「世界一格差のない国」(2008 OECD 発表)「高齢になるほど幸福度が増す国 (2008 オックスフォード大学)」と軒並み世界一に挙げられている。
- 2 文献 3) 579 ページ
- 3 文献 12) 142 ページ
- 4 例えば、handel (貿易)、garther (庭師)、snedker (家具職人) trafik assistent (旅行アシスタント) 等。
- 5 文献 6) 64 ページ
- 6 例えば、文献 9)、10)、11)

<参考文献>

- 1) 西栄子「デンマークの都市計画システムと地方自治体における住民参加の取り組みに関する研究」日本建築学会技術報告集第18号、2003.12
- 2) 西栄子「デンマークの公共性と都市計画における住民参加に関する研究」日本建築学会計画系論文集第581号、2004.7
- 3) 西英子・他「デンマークの新たな地方自治体再編成と交通計画に関する研究」日本建築学会技術報告集第14巻第28号、2008.10
- 4) 小川正光・他『『高齢者住宅』における住戸平面の類型化と計画原則の検討ーデンマークの『高齢者住宅』に

関する研究 その1― 日本建築学会計画系論文集第 560 号、2002.10

- 5) 小川正光・他「コペンハーゲン市域における地区別高齢者の住宅事情―高齢者アクティビティセンター利用者を対象として―」日本建築学会計画系論文集第 568 号、2003.6
- 6) 西野達也・他「デンマーク・オーフス市の高齢者通所施設の空間の使われ方の特性について」日本建築学会計画系論文集第 601 号、2006.3
- 7) 西野達也「場の視点からみた高齢者通所施設における集団処遇に関する試論―日本のデイサービスセンターとデンマークのローカルセンターの比較考察―」日本建築学会計画系論文集第 614 号、2007.4
- 8) 松岡洋子「デンマークにおける施設から高齢者住宅への変遷―『できるだけ長く自宅で』から『早めの引っ越し』への政策転換を中心に―」関西学院大学社会学部紀要第 97 号、2004.10
- 9) 登張絵夢・他「利用者の活動からみた通所型高齢者施設の空間構成に関する考察」日本建築学会計画系論文集第 556 号、2002.6
- 10) 西野達也・他「小規模高齢者通所施設の利用実態と空間の使われ方の特性について」日本建築学会計画系論文集第 581 号、2004.7
- 11) 菅原麻衣子・他「高齢者の主体的活動の展開からみた通所施設の空間整備」日本建築学会計画系論文集 585 号、2004.11
- 12) Mogens Fich・他「Old People's Houses」